

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

オプチナ修道院における聖師父文献の出版事業（2）：ロシアの修道制の発展における聖師父文献の翻訳史を中心に

著者	清水 俊行
雑誌名	神戸外大論叢
巻	69
号	1
ページ	85-121
発行年	2018-11-19
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002246/

オプチナ修道院における聖師父文献の出版事業(2)

—ロシアの修道制の発展における聖師父文献の翻訳史を中心に—

清水 俊行

第四章 オプチナ修道院による聖師父文献翻訳のプロセスと方法

イワン・キレエフスキーがオプチナの出版活動に積極的に参加していた時期(1836-1856)には、文字通り聖師父文献の精華ともいえる著作集が次々と準備されていった。これらは、疑いなくその後のロシア正教思想の核心をなすものである。出版に備えた写本の綿密な準備については、彼の日記とマカーリイ長老との往復書簡が証言している。それはキレエフスキー自身が翻訳の様々な写本を監修する間、妻のナターリアは夫と協力して出版組織上の問題を解決するために尽力したことを証言している。キレエフスキー夫妻とマカーリイ長老との間に結ばれた強固な信頼関係は、この共同作業を神の意に適うものとし、神の祝福のもとでなされたことを証することにとどまらず、キレエフスキー自身は、宗教的世界観とそれ以外の学問や生活に関する世界観とを繋ぐ糸となるこれらの著作がロシアを照らすことになることに大きな希望を抱いていた。⁷⁷ 彼が残りの人生をその実現に捧げることへの祝福と庇護をマカーリイ長老に求めるようになるのも、その霊的な後ろ盾があったからである。

マカーリイ長老はオプチナから数キロ離れたところにあったイワン・キレエフスキーの領地ドルビノをしばしば訪れていた。1845年には、キレエフスキー自らが主幹を務める雑誌「モスクワ人」のために霊的な内容の論文を書いて欲しいと長老に申し込んでいる。というのも、長老は自らの手元に手稿のまま残されていた『パイーシイ・ヴェリチコフスキー伝』(作者はパイーシイの周囲にいた修道士たちで複数いると想定されている)を自ら筆写して、すでに同雑誌に掲載していたからである。⁷⁸ 聖伝は45年の第4号にその一部が掲載され、

⁷⁷ 注73を参照。И.В. Киреевский. Переписка И.В. Киреевского и преподобного Макария (Иванова). 1846-1856 годы. 68-е письмо. В кн.: Разум на пути к истине. С. 379.

⁷⁸ このことは、現存する版の上書きに書きつけられた次の言葉によっても裏付けられている、「この伝記は1839年10月25日に罪深い修練士マカーリイによってオプチナ修道院の庵室にて書かれた」。НИОР РГБ. Ф. 214. Ед. Хр. 220. Л. 122 об. // Цит. по соч.: А.В. Гвоздев. Мистико-аскетическая традиция в историсофской концепции И.В. Киреевского. В кн.: Иван Киреевский. Духовный путь... С. 372.

読者の間にひとかたならぬ関心を引き起こした。そこではパイーシイ長老の翻訳になる聖師父の手稿の翻訳が多数存在し、それらが信仰者にとってかけがえのない大きな財産であることが修道士たちによって証言されていたからである。

オプチナ修道院による出版活動の意義は、まず何よりも、それまで知られていなかった聖師父の作品を同国人に母国語によって知らしめたことにあるが、なかんずく、禁欲主義文献翻訳の大部分がマカーリイ長老の時代にロシアの修道院内で実行されたという事実は、他の修道院はおろか、オプチナ修道院の文化的貢献という意味で前例のない意義を付与したことは疑いない。だが、ここで言われる、パイーシイによるギリシャ語からの翻訳をもとに、マカーリイ長老が「翻訳」するとは何を意味していたのか。これについては若干の説明を要する。この場合、「スラヴ語訳 (славянский перевод)」とは教会スラヴ語への翻訳を意味し、「半スラヴ語訳 (полуславянский перевод)」とは、いくらかロシア語化した形態を含む翻訳を意味していた。⁷⁹ またそれらが混在する場合も少なからずあった。両者を区分する厳密な規則はないものの、大まかに整理すれば、パイーシイ長老の翻訳は前者を、その後のオプチナでの翻訳活動は、読者の便宜を考慮した上でなされた後者の翻訳を意味していた。

マカーリイ長老の時代に、修道院に翻訳者たちの集団が組織され、ロシアの禁欲主義的術語に関する体系が初めて編まれ、翻訳活動の規範が作られたのは、他ならぬそのためであった。言うなれば、マカーリイ長老は禁欲主義文献を専門的に扱う修道院付属の翻訳学校を設立したのである。

こうして教会スラヴ語の原文を現代ロシア語の字体で記述した『パイーシイ・ヴェリチコフスキー伝』は、修道生活の三つの位階について説明するドミートリイ神父に宛てた二通の手紙を付して出版された。だがこれは活動全体からすれば、ほんの序章にすぎなかった。この後、まもなくパイーシイのそれ以外の翻訳を出版しようとする動きが起こったことは、マカーリイ長老の伝記の作者レオニード・カヴェーリン神父も認めるところである。

翌 1846 年に、彼らの領地のあるドルビノ村にあるキレエフスキー夫妻宅にお客に呼ばれて行ったとき、長老はこのもてなし好きな夫妻との和やかで心のこもった談話の中で、様々な霊のことがらについて話しながら、活動的なキリスト教的な生活へと導く霊的な書物が不足していることに触れた。そしてこの談話の最後に、彼はパイーシイ長老が翻訳した修行を实践した聖師父たちの、分別と益に満ちた作品の手稿を相当量所

⁷⁹ В.В. Каширина Литературное наследие Оптиной Пустыни. М., 2006, С. 65.

有していると語ったのである。さらには、かつてノヴォスパスク修道院のフィラレート長老の霊の子であったナターリア・ペトロヴナ〔イワン・キレエフスキーの妻〕のもとにも、福たる長老から託された同類の写本が何点か保管されていることが判明したのである…⁸⁰

この事実はキレエフスキーとマカーリイ長老の往復書簡によっても確かめられている。そこでは、通常、細かな翻訳や出版上の問題について意見を交換するのであるが、その内容からは、キレエフスキーがフィラレート長老から証聖者マクシモスの『天主経講釈 (Толкование на Отче наш)』、哲学者ユスティノスの『聖三者論 (О Святой Троице)』、タラシオスの『四つの束 (Четыре сотницы)』、シュメオン・エオハーン〔出生不明〕の『沈黙について (Слово о безмолвии)』の写本を受け取っていたことがうかがえる。⁸¹ そこでキレエフスキーはこんなことをマカーリイ長老に書いている、「これら四書が間違いなくパイーシイ長老によって翻訳されたことは、今は亡きフィラレート神父からいただいたこれら書物の版が証言してくれています。つまり、その両側の余白には、ギリシャ語の“フィロカリア”の頁が書き込まれているほか、パイーシイ長老の表記法が踏襲されており、単語の上にはシリアのイサアクの写本の時と同じ点が打たれているのです」。⁸²

だが、結論から言えば、マカーリイ長老はこれらを公刊する意志のない旨回答してきたため、キレエフスキーは検閲や出版に関わる一切の手続きを自らが引き受けることを条件に、これらを出版するための祝福を得たのだった。とはいえ、キレエフスキーが引き受けたこれらの業務は、当局が当時正教会とフリーメイソンの思想的対立に警戒感を露わにしていたことを考慮するならば、容易に履行されなかったことは想像に難くない。これら書物の著者である東方正教会の正統派の思想家、苦行者たちは、等しく神秘主義的傾向を持った異端派、もしくは自由石工連合 (フリーメイソンの共済連合) の会員と見なされ、神学校などでも彼らの著作は偽神秘主義者、夢想者の書物と同一視され、禁書扱いを受けていたのである。⁸³ ピョートルの改革によって新たに規定された宗務院が管轄する印刷局は、事実上、東方教会の宗教書を禁書にする目的を隠し持っていたと言っても過言ではなかった。その検閲を通過して出版に漕ぎつ

⁸⁰ Житие Оптинского старца Макария. Сост. Архимандрит Леонид (Кавелин). Оптиная пустынь. 1995. С. 159.

⁸¹ См.: Протоиерей Сергей Четвериков. Оптиная пустынь. М., 1987, С. 123.

⁸² Переписка И.В. Киреевского и преподобного Макария (Иванова). 1846-1856 годы. 4-е письмо. В кн.: Разум на пути к истине. С. 299.

⁸³ Прот. Георгий Флоровский. Пути русского богословия. Париж, 1934. Репринт. С. 126.

けた書物といえ、当時ではやはりパイーシイ・ヴェリチコフスキーの翻訳・編集になる『フィロカリア』（1793）以外はほとんどなかった。それに加えて、当時は外国からロシアへの霊的書物の持ち込みは固く禁じられていたため、1812年にモルダヴィアのニャメツ修道院で出版されたパイーシイによるシリアのイサアクの翻訳書も非合法書物とされていた。マカーリイ長老がキレフスキー夫妻の奨めを敢えて断ったのも、こうした理由によるのかもしれない。

しかし、19世紀になると、事態は劇的に変化した。1821年にモスクワの主教座に大主教として就いたのは、古代語に通じ、自らが聖書の翻訳者でもあり、修道制の復活に大いに期待を寄せていたフィラレート・ドロズドフであった。彼は聖書翻訳のみならず、オプチナの聖師父文献の出版事業についても庇護者としてその活動を促進させたからである。⁸⁴ オプチナの出版事業に何らかの障害が起こった場合、最終決定はフィラレートに委ねられることになった。さらには同じ頃検閲官に任じられたモスクワ神学大学教授のフョードル・ゴルビンスキー（哲学担当）は編集方針に対して発言力を持ち、キエレフスキーの盟友で後にモスクワ大学教授になるステパン・シェヴィリョーフ（雑誌「モスクワ人」編集長）も校訂者として大きな影響力を発揮した。これらの人々から形成された聖師父文献に関わる所謂「モスクワ出版団」こそ、マカーリイの意を受けたパイーシイ文献出版事業の事実上の担い手となったのである。

他方、マカーリイ長老自身の周囲にも、主にオプチナの修道士からなる翻訳の専門家集団が形成された。アムヴローシイ・グレンコフ神父（マカーリイ長老の後継者）、レオニード・カヴェーリン（『長老マカーリイ伝』の著者）、クリメント・ゼーデルゴリム神父（モスクワ大学の古代哲学教師、後にオプチナ修道院の修道司祭）、ユヴェナリイ・ポロフツェフ神父（後のヴィルナ、リトワの大主教）がその中心人物であったことはすでに述べた。この間の経緯についても、レオニード・カヴェーリンの筆になるマカーリイ伝は長老の参与のあり方について信頼に足る以下のような情報を提供している。

この事業のために上記の人々は毎日長老の庵室に集まっていた。長老は修道士たちや参禱者との日常的な修行を中断することはなかったし、いつも決まった時間には宿坊を訪ねたりもしていた。にもかかわらず、この事業には最も積極的に関与していた。ただひとつの表現も、ひとつ

⁸⁴ Александр Иванович Яковлев. Святитель Филарет в церковной и общественной жизни России XIX века. В кн.: Святитель Филарет (Дроздов). Избранные труды, письма и воспоминания. М., 2003. С. 29.

の単語も、長老個人の判断を仰ぐことなく、検閲から送られてくる写本に書き込むことはなかったと自信をもって言うことができる。⁸⁵

ではクレエフスキーは具体的に何をしたのか。長老との往復書簡から推察する限り、彼は出版社から部分的に送られてくる校正刷りをギリシャ語の原文と照合し、各行に見受けられる不明瞭な箇所言語注を施していった。語法にも正確さを期すために、しばしば専門家との仲介役をも果たしていた。彼自身、より徹底的にギリシャ語を学習する必要を口にしていたのはそのためであった。それと並行して、出版資金を捻出するために、様々な方面に奔走していた。とりわけ、妻ナターリアは資金不足に陥っていた大学印刷所に物質的援助を申し出て、出版までの段取りを精力的にとりなしていた。⁸⁶

ともあれ、パイーシイ長老が自らの翻訳体験から、聖師父文献が一般的に理解困難と見なされている原因を、翻訳そのものの欠陥と筆耕者の転記ミスに帰していたことから、オブチナ修道院の出版局では、マカーリイ長老によって、とりあえずパイーシイ翻訳をむやみに修正しない方針が打ち出されていた。そのうえで、複数存在する翻訳の写本をもとに、最も信頼に足る翻訳を作成することを共通の課題として掲げた。したがって、仮に検閲官が読者の便宜を考慮して、よりわかりやすく改訂しようと提案しても、それらがよく知られた写本に残されていない限り、編集者シェヴィリョーフといえども、マカーリイ長老の同意なくして採用することはなかった。⁸⁷ それでも理解に困難な個所が生じた場合は、脚注にその旨を指摘するようになった。つまり、テキストに異動が生じた場合は、すべて語注としてその事実を明記し、両テキストを併記するという原則が出来上がっていたのである。

以上の事実関係を整理して、写本を保有するオブチナ修道院のマカーリイ長老の指示を受けたモスクワのクレエフスキーを中心とする出版局がいかにして検閲と印刷所を仲介し、出版に漕ぎつけたのかをグヴォズジェフの記述によって確認しておく。まずはオブチナの修道士たちがクレエフスキー夫妻に写本(手稿)を送りつける。送付された写本は、最終的に雑誌「モスクワ人」編集長のステパン・シェヴェリョーフによって出版の手続きが行われ、検閲を通過後、モスクワ大学の印刷所に植字のために運ばれる。数日後、印刷された校正用のゲラがオブチナのマカーリイ長老のもとへチェックのために送付される

⁸⁵ Житие оптинского старца Макария. С. 164.

⁸⁶ См.: А.В. Гвоздев. Указ. соч. С.390.

⁸⁷ Переписка И.В. Киреевского и преподобного Макария (Иванова), старца Оптинской пустыни. 1846-1856 годы. 1-е письмо. В кн.: Разум на пути к истине. С. 294.

が、この間の検閲とのやりとりは最も緊張を強いられるものとなった。キレエフスキーはマカーリイ長老にこう書いている、「検閲官によってなされた変更は、そのまま残さなければなりません。その後あなたが手稿に加えた変更は、改めて検閲に提出しなければならないのです」。⁸⁸ モスクワの出版者たちは回答を受け取ると、指摘された誤りを正し、全編を印刷に持ち込む。印刷が終わると、検閲から発行される特別の番号札によって、印刷所から書物を受け取ることになる。

シェヴィリョーフがマカーリイ長老から手稿を受け取ったのは1846年の3月のことであった。彼は最初の全紙7枚〔一枚が本の16頁分となる〕を同年6月30日にドルビノのキレエフスキーに送っている。ナターリア・キレエフスカヤは最後の12枚目の全紙を1846年12月末にマカーリイ神父に発送している。12月の最後の日にフォードル・ゴルビンスキーが個人的にモスクワにいたキレエフスキー夫妻を訪ねている。彼は誤植に関するマカーリイ長老の指摘をすべて是認し、翌週にも本を受領するための番号札を発行する用意があることを伝えたのだった。その言葉通り、キレエフスキーは1847年の1月5日に検閲から札を受け取っている。ナターリア・ペトローヴナは早速、そのことをマカーリイ長老に手紙で報告した。そこで、彼女はすでに10人から問い合わせを受けたこと、書籍代は銀1ルーブルと決まったが、それが印刷所の植字工の多大な労力を考えれば、非常に安価であり、多くの正教徒に入手可能な価格であることを嬉しそうに物語っているのである。⁸⁹

これからは、キレエフスキーが直接関与したパイシイの伝記に始まり、マカーリイが翻訳を指揮した数々の聖師父文献がいかにして出版を実現させていったか、さらには、キレエフスキー、マカーリイ長老亡き後、こうした伝統がいかにかオプチナ修道院に受け継がれていったかという経緯を、出版された書物を年代順に追って概観していくことにする。

⁸⁸ Там же. С. 293-294.

⁸⁹ См.: А.В. Гвоздев. Мистико-аскетическая традиция в историософской концепции И.В. Киреевского. В кн.: Иван Киреевский. Духовный путь... С. 392-393. またナターリア・ペトローヴナ・キレエフスカヤの手紙は以下を参照した。Письма Наталии Петровны Киреевской к оптинскому старцу иеросхимонаху о. Макарию. В кн.: Прот. о. С. Четвериков. Оптина Пустынь. Париж, 1988, С. 208.

第五章 オブチナ修道院の聖師父文献出版一覧とその特徴

1) 『モルダヴィアの長老パイーシイ・ヴェリチコフスキーの伝記と著作』(1847)⁹⁰

初出はキレエフスキーを編集主幹とする雑誌「モスクワ人」の1845年12号(第二部、No.4、1-76頁)。単行本も同年に、また1847年に掲載された翻訳に各々序文を付けた所謂増補版が出版された。所謂オブチナ版が編まれる原典となったのは、パイーシイの弟子の修道司祭プラトンが編纂したスラヴ語によるパイーシイ長老伝(1836)の現代ロシア語への翻訳版であった。このプラトン神父は、30年間長老の修練士を務めたミトロファン神父による版と、イサク神父がモルダヴィア語で書いたより詳細な初期の版を利用したと言われる。⁹¹ もっとも、初版の単行本は、雑誌と同じ45年に出版されたことを見ても、雑誌「モスクワ人」の抜き刷り版であった可能性が高い。45年にオブチナ修道院から同書が出版されたことを証するオブチナのスキトの記録は以下のようにこの事実を書き留めている。

イワン・ワシーリエヴィチ・キレエフスキー氏より、モルダヴィアのニヤメツ修道院の掌院、福たるパイーシイ長老の伝記を100部、その冊子の付録として典院に宛てられた肖像画も100部受領した。手稿は先立ってモスクワのキレエフスキー氏に送付されたが、氏は雑誌「モスクワ人」の発行者として、それを自身の雑誌に掲載したうえで、自腹を切って個別に印刷したのである。個別の印刷代として神父は金を送ったが、キレエフスキー氏の妻であるナターリア・ペトローヴナはハリストティアニンとしての熱意に促されて印刷させていただいたと説明して、金を返還してきた。7月末の数日間、キレエフスキー氏は一家をあげてのモスクワから帰途に際して、修道院とスキトを訪問した〔オブチナからキレエフスキーの領地ドルビノまで40キロ〕。⁹²

キレエフスキー一行によるこのオブチナ来訪の目的は、言うまでもなく、書物の納入であり、事実、修道士の霊に資する同書が気前よく配布されたと伝えられている。またそれから約一年半後の1847年1月には、パイーシイ長老の

⁹⁰ Жизнь и писания молдавского старца Паисия Величковского. С присовокуплением предисловий на книги Св. Григория Ситаита, Филофея Синайского, Исихия Пресвитера и Нила Сорского, сочиненных другом его и сподвижником, Старцем Василием Поляномерульским, о умном трезвении и молитве. Изд. Козельской Введенской Оптиной Пустыни. М.: В Унив. Тип. 1847.

⁹¹ См.: Каширина В.В. Литературное наследие Оптиной пустыни. М., 2006. С. 66.

⁹² Летопись скита во имя святого Иоанна Предтечи и крестителя Господня, находящегося при Козельской Введенской Оптиной пустыни. Т. 1. М., 2008, С. 105. 同書は以下の古文書を出典とする出版物である。НИОР РГБ. Ф. 214. Опт.-360. Л. 59. [] による注釈はすべて筆者自身による。以下も同様。

弟子たちの修道生活と功に関する短い物語に、長老の著作のリストに序文が付された増補版が新たに出版されている。これについても、オプチナ・スキトの記録 1820-1851 年の 1847 年 1 月の項目には出版にいたる経緯が詳しく記されている。

このうえなく慈悲深き主の祝福と諸聖神父の祈祷によって、一月に『モルダヴィアの長老パイーシイ・ヴェリチコフスキーの聖伝および著作』と題された書物の印刷が終了した。… 修道生活を営む者たちにとってきわめて有益なこの手稿はオプチナ修道院の典院モイセイ神父、スキトの長たる修道司祭マカーリイ神父のもとに保管されていたものであるが、いくつかはサンクト・ペテルブルグのセルギイ第一種修道院の院長を務める掌院イグナーチイ・ブリャンチャニノフ、それにボルホフ修道院院長の掌院マカーリイから送られたものであった。典院モイセイ神父とスキトの長たる修道司祭マカーリイは主に助けを求めると、手稿の写しを取って、昨 1846 年にモスクワ大学教授のステパン・ペトローヴィチ・シェヴィリョーフ、ベリョーフの地主イワン・ワシーリエヴィチ・キレエフスキーとその妻でやはり有益な手稿を何点か保管していたナターリア・ペトローヴナの仲介を得て、それをモスクワの宗教検閲委員会に送った。これら信仰深き面々はモスクワで、検閲からの受け取りに関して、最大限の努力と監督を行ったばかりか、印刷に際しては、校正者の役割をも演じた。それに加えて、同書の写本一枚が刷りあがるや否や、校正を終えたゲラを早速スキトのマカーリイ神父宛てに郵送していた。マカーリイ神父の方はそれに目を通し、手稿原本と照合して、そこに発見した誤植を残らず彼らに報告するのだった。⁹³

こうした経緯から判断する限り、ドルビノ村でキレエフスキー夫妻から受けた霊的な著作の執筆依頼が長老によって果たされた形跡はない。しかし、パイーシイ伝の第二版（1847）、およびその直後にさらに増補されて出版された第二増補改訂版には、同書全体を俯瞰する書物全体の序文がこのマカーリイ長老によって書かれている。と言うことは、察するに、長老はドルビノでキレエフスキー夫妻との間に出版活動に取りかかる話が持ち上がったとき、もしくはその前後にドルビノを何度か訪問した際に、序文の執筆に着手した可能性があるのではなかろうか。

そうなれば、キレエフスキーの領地ドルビノで想を得たパイーシイの書物の

⁹³ Там же. С. 123-126.

出版がマカーリイという舵取りを得て、オブチナの長老制の発展の礎となり、さらには同修道院の聖師父文献の写本出版を促す原動力になったと見る根拠も生まれてくる。それは古来、禁欲主義的な祈りの形態として知られてきた「イイススの祈り（知恵のいとなみとも称される）」を現代の修道生活に再興させようとする動きにも現れていた。マカーリイ長老はイイススの知恵の祈りと修道生活の原則の再興に貢献したパイーシイの役割を強調し、その成果として、『フィロカリア』のロシア最初の出版について物語っている。序文にはキレエフスキーの言葉に発すると思しき以下の挿入が見られる。

ついに長老の弟子アフナーシイ〔オフロプロコフ、スヒマ僧でパイーシイとアトスで共に修行した〕が府主教座下〔『フィロカリア』出版に祝福を与えたペテルブルグの府主教ガヴリイル〕にギリシャ語の原本と長老らによるその翻訳を送り届けた。…その後、その原本はセルゲイ大修道院のギリシャ語教師であるヤコフ・ドミートリエヴィチ・ニコルスキーに改訂と校正を担わせるために送られた。…その結果、理解が困難な箇所はわかりやすさを優先して手が加えられることになった。⁹⁴

ところが、当のキレエフスキーはこのエピソードにきわめて懐疑的であり、マカーリイ長老に宛てて書簡でこう打ち明けていた、「わたし自身は序文で、ゴルビンスキーが提案したように、アフナーシイに対しては壁を設けていました。しかし、色々と考え合わせると、ゴルビンスキーが言うように、ニコルスキーが『フィロカリア』の訂正を行ったことで、この事業に対して有益な仕事をしたようには思われぬのです。おそらく、府主教ガヴリイルの言うように、彼は出版を手伝ったというより、むしろ邪魔していた教養ある校訂者の一人と見なすのがより確実ではないかと思われるのです」。⁹⁵

このような経験をもとに、キレエフスキーは史料的価値の保護というより、むしろ真理の把握は、霊的全一性を獲得し、完成の一定の水準に到達した人間にのみ可能であるという観点から、パイーシイの翻訳には触れないという原則を主張するようになっていた。したがって、完成の域に達していない人間の改訂行為は、それがいかなる水準のものであれ、真理の源泉を曇らせることになりかねないとキレエフスキーは考えるようになる。翻訳や脚注を並行して行うことが必要とする考えもそこから生まれた。彼は書いている、「これはパイー

⁹⁴ Житие и писания молдавского старца Паисия Величковского. М., 1847, Репринт. С. II.

⁹⁵ Переписка И.В. Киреевского и преподобного Макария (Иванова), старца Оптинской пустыни. 1846-1856 годы. 4-е письмо. В кн.: Разум на пути к истине. С. 300.

シイが書いたテキスト自体に手を加えずに、それを聖なるものとして保護するために必要なことであるとわたしには思われたのです」。⁹⁶

序文の後半部分には、「パイーシイ長老の業績や教義を継続させたロシアの修道士たち」⁹⁷に関する簡潔なプロフィールが付けられている。ワシーリイ長老の弟子のソフローニイ修道院の掌院フェオドーシイ〔パイーシイ長老は彼から剪髪を受けていた〕、アトスやモルダヴィアのドラゴミルンの修道院で長い間パイーシイと修行を共にしたクレオパ長老、修道司祭クレオパ〔ウクライナ出身〕、スヒマ僧のフェオドル〔カラチェワの元市民〕、元騎兵大隊の大尉だったスヒマ僧アフナーシイ・ザハーロフ、元元老院書記官から剪髪し、アトスやモルダヴィアを転々として、パイーシイのニャメツ修道院で院長を務めたスヒマ僧アフナーシイ、パイーシイの指導下でモルダヴィアの修道院で修行した修道士パウエル、パイーシイとワシーリイの両長老から剪髪を受けた修道士ゲラシム、パイーシイの弟子からロシアではオプチナ修道院に住んだことのある修道士フェオファンなどである。⁹⁸ 奇しくも、この序文がマカーリイ長老の言葉を借りることで、パイーシイ伝のテキストはこの時代のロシア修道制の系譜を明らかにするという実りを得ることになったのである。これは18-19世紀ロシアの修道思想が一人パイーシイ長老によってのみ花開いたのではなく、上に掲げた無名の修道士たちの祈りの実践によって、パイーシイとオプチナを繋ぐ鎖が確固たるものとなったことを表している。

同書（『パイーシイの伝記と著作』）が雑誌の初出と異なるのは、主としてイイススの祈りに関わるパイーシイの小著作がここにすべて集められている点である（『“主憐めよ”論』、『知恵の祈りについての書』、パイーシイ神父がフェオドーシイ神父、ドミートリイ神父、スヒマ僧アフナーシイに宛てた書簡）。さらに同書に収められたシナイ人のグレゴリオス、シナイのフィロテオス、福たるイシキオスの各著作に付けられたパイーシイの同労者たるワシーリイ長老による序文集が、これら著作に見られる聖師父特有の人間学的諸相を抽出してくれているのも大きな特徴である。

パイーシイ伝の出版の意義をいち早く察知し、この修道院のみならず、ロシアの正教的祈りの発展に決定的な道筋をつくることになったこの傾向を指摘したのは、オプチナの長老と早くから交流を持っていたイグナーチイ・ブリヤンチャニノーフ主教であった。彼がオプチナの修道士たちに宛てた公開書簡から引いておく。

⁹⁶ Там же. С. 299.

⁹⁷ Житие и писания молдавского старца Паисия Величковского. М., 1847, Репринт. С. III.

⁹⁸ Там же. С. III-XVI.

わたしははるか以前より手稿によって知っていたのだが、この度、再び目の目を見ることになった同書には、きわめて時宜にかなったイイススの祈りについての教理が際立った明瞭さをもって叙述されている。もっとも、この祈りについては、大多数の人々にとってきわめて不明瞭で、支離滅裂な理解しか得られていないのだが。… 小生が今こうして上梓する「本」には、イイススの祈りの単純な訓練方法が示されている。そこでは注意を凝らしたうえで、「悔改」の感覚を抱き、口もしくは知恵で静かに唱えることが重要とされている。悪魔は悔改という悪臭に耐えられない。自らこの悪臭を発する霊から、悪魔は自らの美麗をもって逃げ去るのだ。このようにして実行可能なイイススの祈りは、あらゆる慾に対する秀れた武器となり、手作業や旅、その他書物を読むなどといった、聖詠を唱えることができないような場合に行う秀れた知恵の修練にもなるものである。かかるイイススの祈りの訓練は、修道院に居住するすべてのハリストティアニンのみならず、俗世に居住する人々にとっても理にかなったものと言える。⁹⁹

この所謂第二版（マカーリイの序文が付いた初版）が出版されると、同じ年にまもなく第二増補版が企画された。当初は第二版に聖師父文献の翻訳をいくつか付加することが計画されていたが、「あなたの『パイーシイ伝』に、パイーシイ長老によって改訂され、新たに翻訳し直された書物を加えて第二版を印刷することが好ましいのではないのでしょうか」とキレエフスキーはマカーリイ長老に宛てて書いている。「しかし、新神学者シュメオン、証聖者マクシモス（問答書）ストゥディオスのテオドーロス、『シナイのグレゴリオス伝』、8点、もしくは5点でも苦行者マルコスの言葉を印刷すれば、最初の本よりも大部なものになってしまいます」。¹⁰⁰ 結局、最終的に出版者はワシーリイ長老、ソフロニイ、アフナーシイ、アルザマスのアレクサンドルらが聖職者に宛てた手紙に限って出版することにしたのだった。というのも、これらの書簡はいずれも、修道生活やパイーシイの翻訳の問題といった焦眉のテーマに触れているからであった。

⁹⁹ Святитель Игнатий Брянчанинов. Письмо. О вновь вышедшей книге: «Житие и Писания Молдавского Старца Паисия Величковского». О Иисусовой молитве. В кн.: Сергей Александрович Нилус. Полное собрание сочинений в шести томах. Т. 3. М., 2000. С. 623-625. この書簡はセルゲイ・ニルスがオブチナで発見したものである。

¹⁰⁰ Переписка И.В. Киреевского и преподобного Макария (Иванова), старца Оптинской пустыни. 1846-1856 годы. 4-е письмо. В кн.: Разум на пути к истине. С. 298.

スラヴ語版のパイーシイの伝記は全部で四版を重ねた。¹⁰¹ さらに、1906年には、長老の見習い修練士であったスヒマ僧ミトロファンによって編纂された長老の伝記の現代ロシア語訳が出た。その出版を準備したのはオプチナの修道士の掌院アガピート（ベラヴィードフ）であった。¹⁰² これら一連のパイーシイ伝の中で、20世紀以降に再販されたものは、2001年にオプチナ修道院から出た1847年版（第二増補改訂版）のリプリント版のみであり、現代に生きる我々が書物の形で参照することのできる唯一のオプチナ版聖師父文献と言っても過言ではない。

2) 『天使の像を纏った日に修道女に送られた四つの啓蒙的言葉（1848）』¹⁰³

編纂と発話は、修道士司祭ニキフォロス・テオトコス（1731-1800）。初版は1766年に出版された。因みに、「天使の像を纏う」とはマント付の修道女への剪髪式を受けて、正式に修道女となることである。

この書物の作者ニキフォロス・テオトコス（иеромонах Никифор Феотоки）はギリシャ生まれの神学者で、1776年にロシアに来て、複数の主教区を管轄した後、1792年にモスクワのダニーロフ修道院の管轄者となる。その後、アストラハンとスタヴロポリの大主教も務めたが、そもそも彼は神学者のほか、

¹⁰¹ 初版：Житие молдавского старца Паисия Величковского. М.: Унив. тип., 1845. 76, [2] с. 内容は伝記のみで、雑誌「モスクワ人」に掲載されたものの抜き刷りであった可能性が高い。第二版：Житие и Писания молдавского старца Паисия Величковского, с присовокуплением предисловий на книги Св. Григория Синаита, Филофея синайского, Исихия пресвитера и Нила Сорского, сочиненных другом его и спостником, Старцем Василием Поляномерульским, о умном трезвении и молитве. Изд. Подгот. И.В. Киреевский, [иером. Леонид (Кавелин)] М.: Изд. Козельской Введенской Оптиной Пустыни, 1847. Унив. тип., XIX, 318, IV, 1 с., 1 л. портр., 1 л. факсим. 600 экз. これがキレエフスキー夫妻にオプチナの掌院マカーリイが共同編集者として加わった版で、特徴としては、翻訳（シナイ人聖グレゴリオス、シナイのフィロテオス、司祭イシキウス、ソラの克肖者ニールの著作）にパイーシイの友人で同労者であったポリャノメルールスキ修道院の長老ワシーリイが付けた序文、及び彼の論文「冷静さの修行と祈りに関する言葉」が収められている。第二増補版：Житие и Писания молдавского старца Паисия Величковского, с прибавл. М., Изд. Козельской Введенской Оптиной Пустыни. 1847 (Унив. тип.) [1], XVI, 2, 302, VI, 1 л. портр., 1 л. факсим. 600 экз. 付録として 1) 修道士の禁食物節制について：а) 序文、б) ポリャノメルールスキ修道院の長老ワシーリイの研究。2) 元アルザマスの掌院アレクサンドル神父の生涯と彼の霊的な往復書簡が付されている。この版がリプリントとして2001年に再版された。第三版：М.: Козельская Введенская Оптина Пустынь. 1892, (Тип. Т-ва И.Н. Кушнерев и К°). 276, IV с., 1 л. портр. 2400 экз.

¹⁰² Житие молдавского старца Паисия Величковского, переложено с славянского на русский язык архим. А<гапитом (Беловидовым)>. Изд. Козельской Оптиной Пустыни, 1906 г. (собственная тип. Свято-Троицкой Сергиевой Лавры). Рипринтно переиздано: М.: Паломник, б/г.

¹⁰³ Четыре слова огласительные к монахине на день, в который она облеклась в ангельский образ, сочиненные и говоренные 1766 года иеромонахом Никифором Феотокием, бывшим после архиепископом Архангельским и Ставропольским. М.: Изд. Козельской Введенской Оптиной Пустыни, 1848 (Унив. тип.) 40 с. 1200 экз.

数学者、教師、説教者など多彩な経歴を持っていた。とりわけ、『主日の使徒経講釈 (Толкование воскресных апостолов.』 (モスクワ、1800年にギリシャ語、1819年にロシア語版)、『天蓋、もしくは「師父たちの鎖」 (Свод или «Цепь отцов»)』 (聖書の冒頭の八書及びサムエル記、列王記に関する解釈者たちのアンソロジー、ライプツィヒ、1756年、ギリシャ語版)、『シリアのイサアクの隠遁修道規則 (Пустынножительные правила Исаака Сирина)』 (ライプツィヒ、1769年、ギリシャ語版) など、数多くの論争的著作を残した。本書『四つの啓蒙的言葉』は短いながら、修道生活のいとなみに関する大主教の該博な著述をまとめたものである。言葉は説教に用いられたものであるため、口頭で語られたものとしても、書かれた作品としても受容することができる。同書が版を重ねているのも故なきことではないと思われる。¹⁰⁴

3) 『ソラの克肖者ニールが自らの弟子たちに宛てたスキトの生活に関する伝承』 (1849)¹⁰⁵

同書は15世紀の教会イデオログにしてロシア人としては初の「イイススの祈り」の実践者でもあったソラ (川) の克肖者ニール (ニール・ソルスキー) の代表的著作として広く知られるとともに、正教会の修道規則の本質を後世に伝えた修道士の生の証言でもある。この作品の初出は、1813年の主教アムヴローシイ (オルナツキー) の書においてであったが¹⁰⁶、数多の写本を通じて、正教会の修道士の間ではすでに広く知られていたという。彼は長年アトスで修行をした経験があるため、後にパイーシイによって翻訳されることになる同作品を含め、当地で多くの禁欲主義的文献に触れ、そこから多くの書付けを作って、ロシアに持ち帰っていた可能性もあると見られる。

オプチナに存在した手稿輯 (рукописное собрание) の中に、ニールの名を冠した文献はいくつか存在していた。が、最良のものは、カシーリナによれば、40年以上ロスラーヴリの森に居住したドシフェイ長老の手稿輯に収められていた1796年の写本であった。¹⁰⁷ 1827年10月にドシフェイはモイセイと

¹⁰⁴ 2-е изд.: М.: [Изд. Оптиной Пустыни], 1849. 2400 экз.; 3-е изд.: М.: [Изд. Оптиной Пустыни]. 1885 (Тип. И. Ефремова). 40 с. 2400 экз.; 4-е изд., 1896.

¹⁰⁵ Преподобного отца нашего Нила Сорского предание учеником своим о жительстве скитском. М.: [Изд. Оптиной пустыни], 1849 (Унив. тип.). 1200 экз.

¹⁰⁶ Амвросий (Орнатский), епископ. История российской иерархии: В 6 ч. М., 1813, Ч. 5. С. 215-336.

¹⁰⁷ См.: Каширина В.В. Литературное наследие Оптиной пустыни. М., 2006. С. 75. その写本とは以下のものである: Предание учеником своим Нила Сорского («Преподобного отца нашего аввы Нила, начальника скитского, еже есть во области Бела озера Сорския пустыни его и всем прикладно имети сие»). Рук. 1796 г., полуустав. 148 л. 22×17.5. На л. 129 приписка писца: «Списася 1796-го года» // НИОР РГБ. Ф. 214. Опт.-121.

アントニイ（プチャーロフ）兄弟についてオプチナ修道院を訪れ、そのままスキトに住み着いた。ドシフェイ長老が自らの書付けにしたがって作成した手稿をオプチナに持ち込んだのは、おそらくその時であった。もっとも、その後、オプチナ版を準備するにあたっては、参照可能なすべての写本を利用したものと推測される。

オプチナ版の導入部には、ニール・ソルスキーの生涯に関する簡単な情報と、『福たる神父ニール・ソルスキーの書への序文と梗概（Надсловие на книгу блаженного отца Нила Сорского и пристежение）』と題する文章が引かれているが、この部分は『パイーシイ神父の生涯と著作』（1847）から採られたものである。『スキトの暮らしに関する伝承（Предание）』の本編は、いかなる経緯で伝承を編纂する考えが浮かんだのかという問いに答えるニール自身による序文に始まり、その後、内的な心の浄化の修行、つまり知恵のいとなみと心の防御が不可欠であるといった問題について言及される。さらに、十一の講話が続き、八つの主要な慾との闘いに関する父祖の禁欲的教理が叙述されている。第一の講話においては、発意（прилог）、内的対話（сочетание）、真摯なる受容（сложение）、隷属化（пленение）、熱情的傾向（страсть）といった禁欲主義の重要な概念を表す用語が聖師父の教えに準じて説明されている。

この序文で語られた情報をもとに、ニール・ソルスキーが使用したこれらの概念がどこに由来するのかという問題を考えるならば、そこにはアトスで彼が出会った聖師父たちの浩瀚な文献が浮かび上がってくる。彼が読み耽った隠遁者たちは、「内的な浄化と、心の中で知恵によって行われた絶え間なき祈りの方法によって、明るく輝く聖神の煌きを獲得したのである。例えば、大アントニウス、大ワシレオス、シリアのエフレム、エジプトの大マカリオス、シリアのイサアク、バルサヌフィオス、階梯者イオアンネス、聖なる師ドーロテウス、証聖者マクシモス、イシキオス、新神学者シュメオーン、ダマスコのペトルス、シナイのグレゴリオス、ニルス、フィロテオスなどであった」。¹⁰⁸ つまり、彼の本はこれらの人々の言葉で溢れていたのである。また、パイーシイ・ヴェリチコフスキーも一度ならずニール・ソルスキーを引用していた。とりわけ、霊的な指導者が自分の周りにいない時は聖書を試しに用いるべきとの教訓は、パイーシイ自身の経験を通じて、後世の修道者に伝えられたと見なすべきであろう。

ここで注目すべきは、『パイーシイ伝』の中で公刊されたワシーリイ長老による序文（Надсловие）がニールの『伝承』においても使われているという事

¹⁰⁸ Преподобного отца нашего Нила Сорского предание учеником своим о жительстве скитском. М., 1849. С. I-II.

実である。こうしたやりくりにも、編集者の苦労がうかがえるが、克肖者ニールがその著作の中で、「知恵のいとなみにおいては (умной молитвой)、まずは何をおいても心から邪念を追い出すことが必要」¹⁰⁹ と書いたことを、パイーシイは知恵のいとなみの意義を表した端緒と見なしていたからである。

キレエフスキー夫妻にとって三冊目となる本書の出版活動がいかなる気苦労と重圧のもとになされたのかという点に関して証言してくれるのは、ナターリア・ペトローヴナ (キレエフスキーの妻) がマカーリイ長老に宛てた書簡である。彼女はまるで長老に痛悔するかのような調子で書いている。

ニール・ソルスキーの著作集に付された序文について、わたしから申し上げられるのは、それが福たるパイーシイ伝の初版から切り取られたものであるということだけです。今まさに、検閲のために、それに手紙を添えてフォードル・ゴルビンスキー氏に宛てて送付するところです。彼には急ぐようお願いし、主教様にはそれをニールの本のどこに載せるべきか、冒頭にか、末尾にか、お伺いするつもりです。これはニール自身による著作への序文なので、その通りに実行されるでしょう。わたしにとって悔やまれるのは、七枚目の全紙にかなり大きな欠落があったことです。分けても視力が弱く、すべてを読み通すことのできないイワン・ラヴロフ氏の手にも初校が委ねられようものなら、それがために遺漏も起こりうるのです。そんな時は結局わたしが見るはめになります。ところがわたしはと申し上げれば、ラヴロフ氏の検閲を信頼して、初校に準拠して再校、再々校を行うしかないため、つい誤りを見逃してしまうのです。どうかそうしたことを神に免じてお赦してください。ですが、神父様、わたしの一日というものが、そして人生のすべての日々がどれほど細かく、多様に、重苦しいほど分断されてしまったかご存知でいてくださったら。ですから、わたしにはまだ自分に何がなし遂げられるのかもわからないのです。ただ、出来上がったものを送り届けているだけ、それも神父様の聖なる祝福をいただいて初めてなしえたことなのです。それに、ほとんどがわたしに依存しないものでありながら、しばしば時間など諸々のものを奪っていく、思いもよらない不快な妨害に出食わすこともあります... そんなわけで、わたしの欠点に対して寛容であり続けていただけるよう切にお願いします。そして、あなたの熱心な奉仕者であるわたしに、神父様が思いどおりの指示をお与えてくださるのをおやめにならないでください。神父様の指示はわたしに真の慰めをもたら

¹⁰⁹ Там же. С. V.

してくださるのですから ... (1849年5月13日付)¹¹⁰

ここで改めて強調しておきたいのは、この書物の出版に対して特別の関心を抱いたのが、モスクワの府主教フィラレート（ドロズドフ）であったことである。府主教との面会の様子をはじめ、ナターリアが目の当たりにしたフィラレート座下の誠意に満ちた庇護者ぶりは、多くの気苦労からしばしば疲労困憊しつつあった彼女を励まし続けたことを伺わせる。ナターリア・ペトロヴナはマカーリイ長老にこう報じていた。

書物についての話が始まりました。それというのも、金曜日の午後、座下は聖ニール・ソルスキーの本を受領するための番号札をゴルビンスキーから受け取ってわたしに送ってくださったからです。ですが、7頁の「神は完全なるものである以上、人間も完全である (Бог совершенна и человека совершенна)」が欠落したことについては、その頁を印刷しなおすようにとの指令がありました。そのためにはさらに数日間の時間が必要になります。わたしは座下にこのことを説明し、献呈用の本で欠落のある頁をお見せしました。座下は「これは重大な欠落だ」とおっしゃいました。¹¹¹

幾多の問題を乗り越え、1849年の夏になってようやく本書は出版された。一刷だけで1200部を印刷し、本の価格は銀50コペイカと決められた。だが、その直後に、晴天の霹靂とも言うような出来事が起こる。ミハイル・ポゴジンが出版された本には含まれていないニール・ソルスキーの書簡数点の写本を所有していることが判明したのである。シェヴィリョーフはさっそくその写本をナターリア・ペトロヴナに渡して、オプチナから追加で出版したらどうかと提案する。そこでナターリアはこの写本をまずモスクワ府主教のフィラレートに見せることにしたのである。彼女はその時のことをマカーリイ長老に以下のように報告している。

まずは、府主教座下より祝福をいただきましたことを神父様にお知らせいたします。昨日二時間ほど、座下と面会することができ、ニール・

¹¹⁰ Никодим (Кононов), архим. Старцы. Отец Паисий Величковский и отец Макарий Оптинский и их литературно-аскетическая деятельность. В кн: Отечественные подвижники благочестия XVIII-XIX вв. Изд. Введенской Оптиной Пустыни, 1996. С. 517-518.

¹¹¹ Там же. С. 520.

ソルスキーの書簡の出版について話をすることができました。その際、シェヴィリョーフ氏がわれわれに出版するために託してくれた〔ポゴジン所有の〕写本が存在することもお伝えしました。つまり、それを聖ニール・ソルスキーの書物の付録として小冊子の形で出版するのが望ましいのではないかと提案したのです。…座下はこうおっしゃられました、「それがあなたの希望なのか。急ぐに値するほどその書簡の内容が注目に値するのなら、精査してみる必要がある」。そこでわたしはすぐにこう答えました、「ぜひ、お願いします。主教様、さっそくすべてお持ちしますから」。すると主教様はおっしゃいました、「あなたはわたしに検討してほしいと言うが、わたしにはそのための時間が全くないのです。だが持ってくるがよい。その書簡を書きとらせましょう（つまりシェヴィリョーフの例の手稿を）。そうすれば読みましょう」。わたしは心から主教座下に感謝の意を表し、多くのことで主教様を煩わしたことをお詫びしました。そして写しを取ったら、それを持参すると申し述べました。¹¹²

この小さな、ほとんど隠されていた事実一つを取っても、オブチナの出版事業はもはや「イイススの祈り」を实践する少数の修道士たちのために修道院の内側で密に行われた活動ではなく、キレエフスキー夫妻の仲介によって、モスクワ府主教フィラレートにも介入せざるを得ないと認識させるほど、言わば、ロシア修道制の発展に不可欠な意義を有していたことがうかがえるのである。

4) 『靈の糧のために摘み取られた穂』(1849)¹¹³

同書にはパイーシイ・ヴェリチコフスキーによる聖師父の著作の翻訳が含まれている。具体的には、イオアンネス・クリュソストモス（金口イオアン）の祈りに関する6つの言葉、パラマスの聖グレゴリオス、証聖者マルコス、ガリシアの証聖者メリティオスによる数章、苦行者マルコス、アッヴァ・アンモニオスの靈的修行の言葉、克肖者ゾシマスの靈に益する談話、聖テオグノースト

¹¹² Там же. С. 520-521. その結果、オブチナ版の付録となるはずの小冊子は出版されなかったが、1852年サンクト・ペテルブルグの宗務院印刷所から、その書簡を含む教会スラヴ語版の『伝承』が出版された。Преподобного отца нашего Нила Сорского предание учеником своим о жительстве скитском. СПб., Изд. Св. Синода, 1852.

¹¹³ Восторгнутыекласы на пищу души: [Пер. из творений святых отцов старца Паисия Величковского] / [Подстороч. примеч. иером. Макария (Иванова)]. М.: [Изд. Оптиной Пустыни], 1849. [208 с]. 1200 экз. 80 коп. (2000年にモスクワ総主教座からこの版のリプリントが出版された); 2-е изд.: М., 1906.

スの行いと視線についての数章、隠修者修練士イオアンネスに宛てたエウハイトの府主教克肖者シュメオンの親書である。慣例によって、この出版物は詳細な脚注が施されているが、これはマカーライ長老によるものである（注の110を参照）。同書のテキストはかなり詳細に検討されたようで、なかでも、苦行者マルコスの数章の翻訳に不明瞭な箇所が散見されたことから、1858年にオプチナでマカーライの指示によって新たなロシア語訳が作られたことにもそれは現れている。同書が改訳や脚注を施してこれほど丹念に出版されたのには、大きな理由があった。それはパイーシイ長老の前著（1の聖師父翻訳）の補遺という役割を担っていたからである。つまりパイーシイ長老は「知恵のいとなみ」の理論的枠組み作りに従事していたため、『フィロカリア』には収められなかったものの、この問題を扱った聖師父の禁欲主義的著作のかなりの部分をここに集めることにしたのである。加えて、長老への服従や謙遜といった彼の根本的な教理を説明するための典拠の多くがここに含まれているという意味でも、この書の価値は大きいと言わざるを得ない。¹¹⁴ 言わば、パイーシイが聖師父文献に関心を抱いたのは、そこに彼自身の関心の中心を占めていたイイススの祈りの理論的裏付けを数多く見出していたからであると思われる。

同書の初版はオプチナ修道院の出版局（モスクワ大学の印刷所）から1200部発行された。ただ、この本の出版にキレエフスキー自身がどの程度関与したかを表す資料はない。むしろ、出版の手続きと印刷所への行き来に関しては、妻のナターリアがすべて引き受けていた感さえある。例えば、マカーライ長老に宛てて書いた以下の報告である。

主のおかげで、この出版を何とか滞りなく終えることができました。検閲用のゲラのために奔走し、なんとか交渉して、それらを印刷所からもぎ取ることができました。それは火曜日の9時すぎのことでしたが、10時にはもうニコライ〔アレクセーヴィチ・エラーギン：イワン・キレエフスキーの異父兄弟〕がわたしのゴルビンスキー宛ての手紙を持ってトロイツァ通りにいたのですから。そしてもう受領用の番号札を持って帰ってきました。わたしはその札を今しがた印刷所に発送したところです。神に光栄あれ、慈悲深き主に光栄あれです。¹¹⁵

因みに、スラヴ語版の『霊の糧のために摘み取られた穂』の各著作は1887年に作品別に再版され、さらに、1905年にはアガピート（ペロヴィードフ）

¹¹⁴ См.: Никодим (Кононов), архим. Указ. соч. С. 496-497.

¹¹⁵ Там же. С. 524.

によって現代ロシア語に翻訳された。

5) 『シナイ山の典院克肖なる我らが神父イオアンネスの階梯と司牧者への言葉』(1851)¹¹⁶

6世紀にスラヴ語で出版された『階梯 (Лествица)』はそれを伝って自己完成を目指す修道士たちにとって修道生活の鑑とされたことから、著者もこの書物の名を借りて「階梯者 (Лествичник)」と呼ばれるようになった。

階梯のイメージはイアコフが夢の中で見た、天と地を繋ぐ階梯(創世記、28章10-16)に由来する。天使たちがそこを行き来しており、天上には主が立っておられるのだった。著者の考えるところでは、これは霊的な自己完成の階梯を、不断の努力によって困難を克服しつつ天上へと上昇していく修行者の絶え間なき道を具象化したものであり、この階梯の段は社会奉仕へと入っていく時のハリストスの年齢に因んで、30から成っていた。内容的に『階梯』は二つの部分に分けられる。前半ではキリスト教的な生活に反する悪徳(1-23章)について語られ、後半では道徳的、神学的な美德の概念が解明されていた(24-60章)。

こうした形式の明解さも手伝ってか、本書は中世に絶大な人気を誇ったようで、早くも10-11世紀にはロシア語にも翻訳されていた。1647年にはモスクワでスラヴ語によるロシア最初の版が出版されたが、そこにはニール・ソルスキー、マクシム・グレーク等による注釈が付けられていた。注目すべきは、この初版本が二部オプチナ修道院の蔵書館に保管されていたことである。¹¹⁷すでに指摘したように、パイーシイ・ヴェリチコフスキーによる翻訳の手稿(もしくはその写本)は19世紀に入ると、その弟子たちによってロシアに持ち込まれていた。オプチナの長老たちモイセイとマカーリイは各々の師からパイーシイの訳した聖師父著作集の手稿を受け取ると、それをオプチナに持ち込んだのである。そのひとつは、掌院モイセイ自身によってブリャンスクのスヴェンスク修道院で書き取られた1810年版『階梯』の手稿であり、もうひとつは、克肖なるマカーリイ神父がプロシヤンスク修道院でスヒマ僧アフナーシイ長

¹¹⁶ Преподобного отца нашего Иоанна, игумена Синайской горы, Лествица и Слово к Пастырю: [Полуславянский перевод] / [За основу взят перевод старца о. Паисия; Ред. Перевод иером. Макария (Иванова), иером. Амвросия (Гренкова); Сост. предм. указ. иером. Макария (Иванова)]. М.: [Изд. Оптиной Пустыни], 1851 (Тип. В. Готье). XXXIII, [3], 405, [1], II с.

¹¹⁷ См.: Каталог замечательных рукописей, старопечатных и других редких книг Оптиной Пустыни. В кн.: Историческое описание Козельской Введенской Оптиной Пустыни. Сост. Леонид (Кавелин). Изд. Свято-Введенской Оптиной Пустыни, Приложение. С. 157.

老から受け取ったパイーシイの翻訳から取られた写本であった。¹¹⁸

1851年に行われたオプチナ修道院での出版準備に際して最も積極的に参加したのは、言うまでもなく、マカーリイ長老自身であった。それに彼の弟子たちも数人加わった。この間の経緯を最も正確に物語ってくれるのは、マカーリイ長老の伝記を書いたレオニード・カヴェーリンである。

また長老はもう一人、シナイ山で修行した修道生活の偉大な教師、階梯者聖イオアンネスの著作の出版に関しても少なからず尽力した。シナイ山はかつて神に選ばれた民が、神に会ったモイセイを介して誠命を受けた場所である。かくして神秘的世界に通じていたイオアンネスの手を介して、習慣にしたがって生きる修練士たちの霊的な掟が生まれたのである。長老は階梯者聖イオアンネスのこの作品を、聖師父たる苦行者たちの著作と並ぶものとして高く評価し、この不滅の作品の今日まで印刷された有名な版と手書きの翻訳とをすべて相互に照合しながら研究してきた。それから、霊的な分別に満たされ、書物の教養のみでは捉えがたい聖師父の霊的助言を経験的に通過した人物であるパイーシイ長老の翻訳を底本とし、加えて自らも偉大な長老の修道上の美德を受け継ぐにふさわしい後継者として、パイーシイ長老の上述の翻訳を、それをその他の後世に書かれた手書きの翻訳や印刷された版、それにギリシャ語の原文と照合する作業を通して不明箇所を明確にしようとして特別に尽力したのである。その目的は、それを読むに耐えるものにするだけでなく、その本に込められた霊的な教訓による実践的な指導にも耐えうるものとするためであった。このため、『階梯』の翻訳はスラヴ語的言い回しを抑えて書かれた。この作業に熱意をもって従事したのは長老自身であり、それを側で支えたのは、彼に近い教え子である修道司祭アマヴローシイであった。翻訳を終えると、長老は翻訳の付録として、自ら階梯者聖イオアンネスの作品の事項索引を作成したばかりか、体力の衰えも顧みず、自らの手でその写しを取っていた。¹¹⁹

マカーリイ長老のオプチナでの役割は、聖師父文献の出版活動にとどまるも

¹¹⁸ これらの写本はともに、その所有者を表す上書きがしたためられており、前者は掌院モイセイ、後者は修道司祭マカーリイのものであったことが確認されている。現在は、ともにロシア国立図書館の手稿部（НИОР РГБ Ф. 214, Опт.-509—モイセイ所有、Ф. 214, Опт.-510—マカーリイ所有）に保管されている。См.: Каширина В.В. Указ. соч. С. 84.

¹¹⁹ Житие оптинского старца Макария. Сост. Леонид (Кавелин), архим. Изд. Введенской Оптиной Пустыни, 1995. С. 171-172.

のではなく、修道院における修道士たちの霊的な教育に対しても並々ならぬ熱意を持っていたことは、その伝記からもうかがい知ることができるが、その一例として、彼が大斎の礼拝にこの『階梯』の本文を導入したことに触れないわけにはいかないだろう。

大斎の礼拝、分けても第一週と受難週で、通常スキトの修道士全員が領聖の準備をするとき、長老は礼拝中の、つまり第六時課のとき、階梯者聖イオアンネスの誦読を行うことを提起した。そうすることで、大斎中に『階梯』を修道士全員に通読させようとしたのである。長老は自ら本文を分割し、何時どの部分を読むべきかを定めたのだった。¹²⁰

だが、オプチナの修道士が礼拝を通してこの文献に深く関わることで、翻訳されたテキストの意味に対しても、これまで以上に真摯に向き合うことになったことは当然の成り行きであった。マカーリイ長老の伝記の記述によると、1851年の10月にマカーリイ長老はゾシマ女子修道院でトロイツァ・セルギイ大修道院の院長を務めるアントーニイ（メドヴェージェフ）神父に会った際、最近出版された『階梯』のアカデミア版の翻訳にいくつか誤りが見られることを指摘したのである。¹²¹ この話はいつしか府主教フィラレートの知るところとなり、座下はこの翻訳の不備を自ら確かめたいと言い出した。そこでマカーリイ長老はアムヴローシイ神父とイオアン（ポロフツェフ）神父とともに、手に入る翻訳を照らし合わせ、1852年の1月にナターリア・ペトローヴナを介して、以下の手紙とともに自らの意見書を府主教に提出したのである。

慈悲深き主教座下、我が不首尾な文章のために主教様に厄介事を背負わせることになってしまったことをお赦してください。ナターリア・キレエフスカヤを通じてわたしに賜りました主教座下の祝福により、主教様の後ろ盾と祈りを願いつつ、ロシア語訳によって再版された階梯者聖イオアンネスの本を、我が修道院の修道士たち数人とともに通読し、モルダヴィアの掌院パイシイ長老の翻訳と照合した結果、われわれの考えでは、不的確な箇所、もしくはロシア語では霊的な分別を表わさないいくつかの単語が見つかったという主旨の意見書を作成いたしました。小

¹²⁰ Жизнеописание оптинского старца иеромонаха Макария. Сост. Агапит (Беловидов), архим. Свято-Введенская Оптина Пустынь; Свято-Троицкая Сергиева Лавра, М.: Отчий дом, 1997, С. 75-76.

¹²¹ Там же. С. 133.

生はそれらのリストを作成し、府主教座下のご判断を仰ぐために意を鼓してここに提出申し上げることと相成りました。このことに対して、座下の足下に平伏し、この度の暴挙を何卒お赦しくくださいますようお願い申し上げます。わたしどもは決して自分の見解の正しさを主張するつもりはありませんし、すべては主教様の判断と決定に委ねるつもりであります。それゆえ、もしこうした考えが正しくないというご判断でしたら、主教様の愛と寛容さをもってすべてを包み込んでくださいますように平にお願い申し上げます。¹²²

この手紙を受け取ってから数ヶ月後のこと、府主教フィラレートは個人的に話し合う機会を求めて、マカーリイ長老をモスクワに招待している。府主教はマカーリイ長老らの「意見書を翻訳者に渡したものの、あなたの意見書を介して、あなた方と本について話し合うためにわたしが待望し、要求している回答はまだ先方から得られていないのです」¹²³ と返書をしたためていることから、その意見書に対する翻訳者自身の見解を直接求めていたことがわかる。こうしてマカーリイ長老のモスクワ行きは1852年の5-6月に実現することとなった。そこで長老はモスクワ府主教フィラレートのほか、トロイツァ・セルギイ大修道院の院長掌院アントーニイ（メドヴェージェフ）、大修道院の学監掌院セルギイ（リャピジェフスキー）、教授で長司祭フョードル・ゴルビンスキーその他と面会している。

所謂、このときの会談の記録と言えるものは存在しないが、マカーリイ長老がオプチナへ帰還後に写本の紙に書きつけたメモは、オプチナに保管されていた写本が再検討され、系統づけられた結果、いずれの写本が最も信頼できるものであるかという問題に対する最終判断を表すものであった。オプチナ修道院には『階梯』のスラヴ語訳が手稿のまま保管されているが（ロシア国立図書館手稿部：Ф.214, Опт-511, 512, 513）、そのうち、1853年に写し取られた写本 Опт-511 の317枚目にはマカーリイ長老の直筆による書付けが残されており、そこにはオプチナ修道院の『階梯』の翻訳史が詳細に記述されている。¹²⁴ マカーリイ長老は書いている、

階梯者聖イオアンネスの同書はオプチナ修道院で修道士アスチオンに

¹²² Там же. С. 133-134.

¹²³ Там же. С. 135.

¹²⁴ ロシア国立図書館手稿部でこの調査を行なったヴェーラ・カシーリナの研究からかいつまんで紹介する。См.: Каширина В.В. Литературное наследие Оптиной Пустыни. М., 2006. С. 88-99.

よって、オプチナ修道院に存在する同書の様々な翻訳をもとに改訂された版から行書体で書き取られた。最初の翻訳は主要なものであり、最も信頼のおける正確なものとしてわれわれが主に依拠してきたモルダヴィアの長老パイーシイの手稿であり、スラヴ語版である。第二の翻訳は古いもので、紙に印刷されている。そこには地の言葉と解釈が含まれている。(*) 第三の翻訳も印刷されたもので、1794年の翻訳。その文体は本書にも生かされている。第四の翻訳はボルホフの掌院マカーリイによるもので、文語体のロシア語。(**) そして第五の翻訳は、非教会文字のロシア語版で、1851年にモスクワ神学大学で出版された。これらの写本はすべてスキトの修道士たちによって周到に検討され、照合された。そしてわれわれの控えめな(?)一致した見解に沿って、オプチナのスキトの修道司祭アムヴローシイの尽力によって改訂された。同書は1852年、聖三者において崇め讃めらる我らが神の光栄のために、そしてこの神の靈感に充ちた書物を読み、聴く人々の霊に資するものとして完成した。もし、この中に誤植があったならば、我々の無知と浅学ゆえの過ちとしてお赦しいただくよう、この任にあたった我々は切にお願い申し上げます。

(*) 7154 (1656) 年にモスクワで印刷された。この版をもとに 7293 (1785) 年にワルシャワで印刷された。

(**) 掌院マカーリイはアルタイ使節団の宣教師であったが、その後ボルホフのチフヴィン修道院の院長を務め、1847年に亡くなった。彼はギリシャ語から同書の翻訳を行なっていたが、出版する意図は持っていなかった。上述の手稿は<その後中断された>。¹²⁵

このように、『階梯』の本格的なロシア語訳は、1852年に本格的に着手されるまで、完成されたものは存在しなかった。これこそマカーリイ長老とフィラレート府主教の邂逅の直接的成果と呼べるものだったのかもしれない。この翻訳は言うまでもなく、1852年のマカーリイ長老の祝福を経て、長老の愛弟子でありギリシャ語に通じたイオアン（ポロフツェフ）神父と修道司祭クリメント（ゼーデルゴリム）神父によって開始された。さらに、オプチナ修道院の年代記によれば、1854年3月20日にマカーリイ神父が索引の作成に取りかかっ

¹²⁵ НИОР РГБ, Ф. 214, опт-511. Цит. по кн.: Каширина В.В. Литературное наследие Оптиной пустыни. М., 2006. С. 88-90.

たと記されている。¹²⁶ こうしてオプチナ版の『階梯』のロシア語訳が世に出たのは1862年、つまりマカーリイ長老の死後のことであった。

『階梯』のロシア語訳の出版をオプチナ修道院で行うことに祝福を与えたのは、モスクワ府主教のフィラレートであった。しかし、こうした動きに抵抗する勢力が皆無であったわけではない。というのも、同書のロシア語訳はこれより一足早くモスクワ神学大学から出版されていたからである。これに関しても、府主教は興味深い言葉を残している、「神学大学（アカデミア）は自分の訳を出版すればよいではないか。オプチナも自分の訳を出版するのだから」。¹²⁷ 事実、オプチナ版の翻訳は異常なまでの人気を博したため、大方の予想に反して、オプチナ版は大修道院版（モスクワ神学大学版をそう呼び習わしていた）（1851、1854、1869、1894年）に比べて、より版を重ねた（1862、1873、1888、1892、1898、1901、1908年）のである。

1851年のスラヴ語訳と1862年のロシア語訳を比較して見ると、前者のスラヴ語特有の言い回しや語順が現代風に改められてはいるものの、語句の形成の重厚さは維持されているように感じられる。繰り返しになるが、この書物は修道士の自己完成の指標となっていたものであり、大斎の礼拝でも誦経に用いられるなど、実用的な役割をも果たしていたのである。その場合、原典重視といえども、スラヴ的表現が徒らに修道士の理解を妨げる事態はやはり好ましいものとは言えない。まずはスラヴ語へ、そこからロシア語への翻訳というこの『階梯』が辿ったテキスト形成のプロセスこそが、その後のオプチナ修道院の翻訳のあり方を方向づけることとなっていくのである。だが、レオニード・カヴェーリン神父も指摘しているように、「同書は両翻訳ともスキト同様、修道院の修道士たちの間でも必携書として広く知れ渡っているが、大斎の間の奉神礼においては、半スラヴ語翻訳〔つまり1851年版の翻訳〕を読むことがスキトでも、修道院でも推奨されていた」¹²⁸ のである。翻訳改訂の必要性は、重厚で荘厳な響きが求められる奉神礼への適用によって明らかに高まったと見てよい。

奇しくも同書第二版の出版のための準備とは、ロシア語への翻訳作業を含む大がかりなものとなった。このプロセスで残された写本の数々がそれを物語っている。そのうち、まず重要な一步を踏み出したのは、イグナチイ・ヴリャン

¹²⁶ Летопись скита во имя святого Иоанна Предтечи и крестителя Господня, находящегося при Козельской Введенской Оптиной пустыни. Т. 1. М., 2008, С. 318.

¹²⁷ Жизнеописание оптинского старца иеромонаха Макария. Сост. Агапит (Беловидов), архим. Свято-Введенская Оптина Пустынь; Свято-Троицкая Сергиева Лавра, М.: Отчий дом, 1997, С. 123.

¹²⁸ Житие оптинского старца Макария. Сост. Леонид (Кавелин), архим. Изд. Введенской Оптиной Пустыни, 1995. С. 171-172.

チャニコフの翻訳した 1845 年の『階梯』の手稿であった (Ф. 214. Опт-516)。¹²⁹ その重要性は、その後この写本に施された訂正の多さを見れば頷ける。またテキスト校訂の過程で、部分的な類似性を裏付ける別の写本も発見されたという (Ф. 214. Опт-518 が Опт-517 の原版、Опт-519 が Опт-516 の原版となった)。また写本の中には、マカーリイ長老による自筆の訂正が書き込まれたものもあった (Опт-511、516、521)。この書込みは、翻訳の際の語の選択に関する考察が主たる内容で、以下の四つの枠に分けられている。1) 場所、2) 新翻訳の訳語、3) それに対する新提案の訳語、4) なぜそのように思われるか (根拠) である。

例えば、1) 第 25 話 248 項において、掌院マカーリイのロシア語訳によれば、2) 「なぜ我々の知恵は、粗末な袋に入れたままで ... (Почему ум наш, заключаь в мешце скромности...)」となっている箇所を 3) 「なぜ我々の知恵は、謙遜を砦として ... (Почему ум наш, заключаь в твердыне смирения...)」とすべきではないかと提案している。4) 粗末 (скромность) と謙遜 (смирение) とでは、修徳的意味の違いは大きいと彼には思われたからである。そんな折、共同編集者たちからギリシャ語の原典では「平安 (мирность)」にあたる語が使われていることを知らされたのだった。長老は書いている。

平安とは霊の実であり、シナイの克肖者ニルスは、聖詠作家の言葉に基づいて、霊の平安は神の全宇宙であり、自分の場所を平安の中に置くことと言う。というのも、平安とは謙遜に発するものであり、主が福音 (マトフェイ 11 章 29) で言うような霊の安息のことではないのではないか。いずれにせよ、これは粗末ではなく、それより遥かに高度なものなのだ。とはいえ、この単語の意味は万人に知られているわけではない。我々が掌院マカーリイの訳を「謙遜の砦として」に変えることを検討するように申し述べたのはそうした理由による。克肖者ニール・ソルスキーの翻訳にしても、平安という言葉は二度にわたって謙遜に置き換えられているではないか。¹³⁰

この書付けからも、マカーリイ長老の指導のもと、オブチナの共同翻訳者イオアン神父、クリメント神父、アムヴローシイ神父たちと話し合いながら、問

¹²⁹ オブチナ版『階梯』の写本はすべてロシア国立図書館の手稿部 (НИОР РГБ) に保管されている。それらの写本を取り上げる際は、本文中に (Ф. 214. Опт-...) と略記する。手稿のタイトルはいずれも Лествица Иоанна Лествичника на русском языке. Рук. сер. XIX в. となっている。

¹³⁰ Примечания к первоодам Лествицы. Рук. пер. Пол. в., скоропись, 24 л. 35.3×22.2. НИОР РГБ. Ф.214. Опт-527. Цит. по кн.: В.В. Каширина. Указ. соч. С. 97.

題点を議論していく様子がうかがわれる。書付けそのものは非公式なものであり、修道士間の議論のもとになる言葉の備忘録といった性格のものであるが、そこから垣間見ることのできる翻訳に関する思考の深みは、図らずも靈的な概念の理解をめぐる本質的問題と重なり合うことになり興味深い。その意味でも、この写本の存在意義は大きいと言わざるを得ない。

これに関連して、もう一つの例を取り上げておこう。同書の第26話のタイトルの「慾の発意と美德の識別について (О различении помыслов страстей, и добродетелей.)」翻訳に関して起こった問題である。ここでいう識別 (различение) という言葉には、判断、考察 (рассуждение) という言葉に込められているような靈的な意味はない。つまり、ここで理解すべきは、生まれ持った才能によって可能な、事物を単に識別する (различать) ことではなく、謙遜で、汚れのない心と体と口によってのみ賦与される特別な聖なる才能であるとマカーリイ長老は考えていた。それは階梯者イオアンネスが、労働からは謙遜が、謙遜からは判断が生ずる (от послушания – смирение, от смирения – рассуждение) と書き (第4話 106項)、別の場所には、泉の母は深淵であるように、判断の母は謙遜である (мать рассуждения – смирение) (第26話 1項) と書いていることから明らかである。そこから、その判断 (рассуждение) こそが心と体と口が汚れのない人にものみ存するという結論が下される。

だが同時に、同書が修徳の書であることを鑑みれば、修道士たちがこの聖師父の書を読んで、識別という言葉で判断という靈的な修行の意味で解することになることも疑いはなかった。その結果、マカーリイ長老は、「掌院マカーリイが自分のロシア語訳においてしたように、『階梯』の改訂版にもこの言葉をそのまま残し、この「識別 (различение)」という言葉だけ、「判断 (рассуждение)」の意味であることを説明する欄外注を設ける方がよいのではないか」¹³¹ という判断を下すことになる。この「判断」の事例は、奇しくも修道士にとって最も重要な靈的修行こそが行動の概念に対して正確な訳語を与えることになることを経験的に教えていた。善と悪を「識別」する鑑識眼が、神を認識する行動を「判断」する基準を与えていたからである。

オプチナ修道院の古文書庫には、鉛筆による編集の修正が加えられたロシア語版『階梯』のオプチナ版初版 (1862) が保管されている (Ф. 213. К.45, Ед. Хр. 2)。この事実からも、当初のロシア語版テキストが綿密な検討を経て改訂され、それを修道士たちの理解できる形に改善されていったことがうかがえる。こうした翻訳手法の伝統は、マカーリイ亡き後も受け継がれた。同書の写

¹³¹ Там же, НИОР РГБ, Ф. 214, Опт-527. 16 л. Цит. по кн.: Каширина В.В. Указ. соч. С. 98.

本系列をなすそれ以外の出典として注目すべきは、ユヴェナリイ（ポロフツェフ）による『階梯』のロシア語訳に施された克肖者アムヴローシイ（グレンコフ）の注釈である。¹³² 彼は頁を二つの段組に分け、左側の欄に自分（アムヴローシイ）の翻案を、右側の欄にはユヴェナリイ神父の訳語を対比させた。これも、マカーリイ師から直弟子のアムヴローシイ神父へと受け継がれた手法である。このプロセスにイワン・キレエフスキーは直接関与していないものの、聖師父の著作を介して、霊的な知恵を習得するための修行を実践するために、その教義を一言半句まで正確に受容しようと努めたオプチナ修道院の学問的態度がロシア修道制の確立に果たした役割は計り知れない。

6) 『大バルサヌフィオスとイオアンネスによる霊的生活への指南書』(1852)¹³³

この本の最大の特徴は、対話形式、より正確には、問答形式で書かれている点である。これはキリスト教教理の体系的な記述を目指すものではなかったが、長老による日々の霊的涵養の記録、もしくは修徳的指導に従事する長老のために特別に準備された教科書のようなものであり、それだけに修行に関わる実践的意義が大きいと言える。それだけに、府主教フィラレートが出版を急かして、そのためにできる限りの援助を申し出たというのもうなずける。しかし、内容的に多岐にわたるこの大著にかかる翻訳作業は予想外に手間取ったものと見え、1849年9月に開始した写本の照合が、最終的に検閲を通過したのは二年後の1851年の8月23日のことであった。

パイーシイ・ヴェリチコフスキー長老が大バルサヌフィオスとイオアンネスの問答書の存在を知ったのは、ニコン・チェルノゴーレツの著書の中での簡潔な要約を通してであったと言われる。長老はその本の全文を入手したいと強く願うも、長い間それを見出すことができなかった。その後、彼の弟子の一人であるスヒマ僧グリゴリーがアトスを訪れたとき、折しもヴァトペド修道院に休息のため滞在していたコリンフの大主教で愛書家でもあったマカリオスに、自分の師がこの書物を所望していることを告げると、大主教は同修道院の古文書庫の中から同書の羊皮紙の写本二点を見出したのだった。グリゴリーは急いでそこから写しを取ると、パイーシイに献呈した。だがパイーシイ自身はすでに老境にさしかかっていたため、1792年11月15日に弟子の修道司祭ドロ

¹³² Преп. Амвросий (Гренков). Замечания на русский перевод «Лествицы» Иоанна Лествичника Ювеналия (Половцева). 1860-е гг. 14 л. НИОР РГБ. Ф. 213. К. 44. Ед. хр. 1.

¹³³ Преподобных отцев Варсонофия Великого и Иоанна Руководство к духовной жизни, в ответах на вопрошения учеников. Изд. Козельской Введенского Оптиной Пустыни. М., В унив. тип. 1852. [2], XXVIII, 592, [4] с.1200 экз. 2 руб. [С. IX-XXVII: Монаха Никодима святогорца сказание о преподобных Варсануфии и Иоанне zde сокращенне предложенное].

フェイに翻訳を委ね、彼自身は半分ほどに目を通して手を加えるにとどまった。そこで思わぬ問題が起こった。発見された写本はいずれも、多くの脱落箇所を抱えていたのである。その後、ヴェネツィアで1816年にギリシャ語版の『指南書』が出版されるまで、パイーシイは原典と照合して、欠落箇所を補うことができなかつたため、やむなくそのまま残すことにしたのである。1795年11月24日にドロフェイが翻訳を完成させたとき、時はすでに亡きパイーシイの後継者となったソフロニイ長老の時代となっていた。¹³⁴

ここでもこの不明箇所の解決に乗り出したのは、モスクワ府主教フィラレートであった。この問題についても府主教と話し合ったナターリア・ペトローヴナは、府主教の言葉を忠実にマカーリイ長老に伝えている。

聖なるバルサヌフィオスの本のことに、わたしは大修道院の中でかかりっきりになっていました。ギリシャ語の原典を見出し、古いスラヴ語版も探し出すことができたのです。ところが、不思議なことに、スラヴ語の方がギリシャ語よりも遥かに真実を穿っており、正しいのです。我々は以下のようにしましょう。つまり、パイーシイ長老の翻訳はそのままの形で印刷するのです。ですが、そこに欠落した言葉や場所がいくつか見つかったならば、古いスラヴ語写本にあるものはすべて、それに類するものも部分的にギリシャ語と照合して、聖ニールの本の時のように、下欄に脚注の形で示すのです。¹³⁵

実にこのような遠大なプロセスを経て、オプチナの長老たちは修道院の蔵書に同書のパイーシイによる翻訳とその修正を経て完成された正確な写しを所有することになった。この写本は、元を正せば、1827年にまだプロシチャンスキー修道院にいたマカーリイ長老がバルサヌフィオス師の書を行書体で筆写し始めたものであった。「同書は1827年にプロシチャンスキー修道院のマカーリイ神父によって写し始められた書であり、その後はオプチナ修道院のアービーイ・メドヴェージェフ神父によって引き継がれた」¹³⁶ と書かれている。

因みに、オプチナ修道院には1815-1816年にかけて筆写されたバルサヌフィ

¹³⁴ Там же. С. XI-XX. Предисловие монаха Никодима Святогорца. この序文には『指南書』の翻訳史がまとめられているが、この基本情報はオプチナに保管されている写本(Ф. 214, Опт-531)から採られていると推測される。См.: Каширина В.В. Указ. соч. С.103-105.

¹³⁵ Никодим (Кононов), архим. Старцы. Отец Паисий Величковский и отец Макарий Оптинский и их литературно-аскетическая деятельность. М., 1909, С. 79.

¹³⁶ Книга аввы Варсонофия. Рук. 1827 г., полуустав. 228 л. 32×20. НИОР РГБ, Ф. 214. Опт-528. Л. 229. об. この写本こそパイーシイ長老がヴァトペド大修道院から受け取ったギリシャ語の古い写本をもとにドロフェイ神父が翻訳したものである。

オスの『指南書』のもう一つの写本が存在していた。これは修道士マルキアンによって自らが修行する生神女修道院の修道士たちの霊の救いのためになされたものであるが、こちらも翻訳の質については高い評価を得ていた。¹³⁷ さらにオプチナには1818年にソロヴェツキー修道院の修道士シモンによって写し取られた古い写本も、流れ着いていたことがわかっている(Φ. 214, Опт-532)。長老制の復活には聖師父文献に基づく正統な指導が不可欠であるが、背景には、正確な写本を作成した上で文献を広めようとする修道士たちの熱き思いがそれを支えていた。その奔流がマカーリイ長老のもとに集まって、オプチナの出版活動の実態が生まれてきたのである。

その意味で、マカーリイ長老が訳語の決定に指導的役割を果たしたことは事実であるが、出版活動全般、とりわけ写本の作成や修正に関する作業には、多くの修道士が同時並行して関わっていたと言うべきであろう。例えば、修道院長を務めていた克肖者モイセイ長老もこのバルサヌフィオスの『指南書』から1857年7月4日に筆写したとされる写本が存在している(Φ. 214, Опт-529. 250 л.)。また、写本の所有者の変遷についての記録(Φ. 214, Опт-531)によれば、克肖者モイセイと共に修道院に暮らしていた修練士のイオアン・ナゴルキンが手稿を転写し、それが後にポルフィーリイ(グリゴロフ)神父の手を経て、修道司祭エフフィーミイ(トルーノフ)神父に渡ったという例もある。そのエフフィーミイ神父は「同書を永眠した長老たちの霊的ないとなみの愛徳と技術を戦わせ、記憶するために、オプチナ修道院の蔵書に受け入れるよう依頼した」¹³⁸ のだった。

同写本は、最終的にオプチナ修道院によって『克肖者大バルサヌフィオスとイオアンネスによる問答形式の霊的生活の指南書』として1852年にスラヴ語のロシア語表記によって出版された。¹³⁹ オプチナ版の初版には、ニコジム・スヴァトゴーレツによる克肖者バルサヌフィオス長老とイオアンネス長老の生涯に関する序文のほか、マカーリイ長老とアムヴローシイ長老が共同で作成した教訓内容に関わる詳細な索引が収められた。

本が出版されると、ナターリア・ペトロヴナはマカーリイ長老の名前でそれを府主教フィラレートに届けたのだった。その時の様子を彼女はマカーリイ長老に報告している。

¹³⁷ Книга аввы Варсонофия. Ответы на вопросы учеников. Рук. 1815-1816 гг., писанная полууставом, переходящим в скоропись. 253 л. НИОР РГБ, Φ. 214. Опт-530.

¹³⁸ Книга аввы Варсонофия. Ответы великого старца ко авве Иоанну, иже от Миросавы (обители), просившу притти и вселитися у них во общежитии и другим ученикам. Рукопись первой половины XIX в., полуустав. 390 л. 21×16 см. НИОР РГБ. Φ. 214. Опт-531.

¹³⁹ 注131を参照。

主教様はわたしたちを父親のような優しさをもって迎えてくださいました。主教様には献呈本を一部神父様からの託けとして手渡し、神父様からの挨拶を伝えました。彼は大いに満足して本を受取り、こう言われました、「長老たちのもとではすべてがうまくいく、驚くべきことだ。彼らにはとても感謝している」。わたしからは本の刷り具合とアルファベットの索引に注目してもらうようお願いいたしました。主教もすべてをととても褒めてくださいました。終始上機嫌でいらっしやいました。¹⁴⁰

同書を出版する意義について、オリョールとセフスクの大主教スマラグド(クリイジャンフスキー)は「同書を数ある修道院から取り出して、意味を曇らせてしまう様々な誤記を含む写本を転写することは容易なことではなかった」ことを認めつつ、それでも注釈や解説を付けて、この書が印刷されて世に出た¹⁴¹ ことをオプチナの修道士たちの努力の賜物であるとして、その功績を讃えている。

同書は上で指摘した書誌情報からもわかるように、ロシア語の表記を踏襲しているものの、パイシイによるスラヴ語の特性を残した翻訳であった。そのため、同書の出版の意義が認識されるにつれて、完全なロシア語への翻訳の気運が高まった。当然のことながら、オプチナでは1852年にすでにロシア語翻訳への試みが始まっている。マカーリイ長老はこのことをキレエフスキー夫妻に告げている。

聖バルサヌフィオスの著書の翻訳を開始しました。所々難解な箇所があるのですが、そこでお尋ねしたいのが、わたしがロシア語の記述法について知らないために合点のいかない状況なのです。我々の学者諸氏たちは是認していますが、わたしには奇妙に思われるのです。「問いと答え」においては、すべて以下のように書かれています。「同一者から同一者への質問 (вопрос тогожде к томужде)」、もしくは「同一の偉大な長老へ (К томужде великому старцу)」、もしくは「イオアンネスに (К Иоанну)」の後に、「同一の長老へ (К томужде старцу)」。全く同様に、回答の方も「同一者から同一者へ (Тогожде к томужде)」などと書かれています。こうした回答はかなりの数見受けられ、20回、時には50回

¹⁴⁰ Жизнеописание оптинского старца иеросхимонаха Макария. Сост. Агапит (Беловидов), архим. Свято-Введенская Оптина Пустынь; Свято-Троицкая Сергиева Лавра, М.: Отчий дом, 1997, С. 145.

¹⁴¹ НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-361, 71 л. об. Цит. по кн.: Каширина В.В. Указ. соч. С.108.

ずつ繰り返されるものもあります。またドーロテオスに至っては 80 回以上見られます。ギリシャ語版においても状況は同じです。¹⁴²

「我々の学者諸氏たち (наши господа ученые)」というのは、マカーリイ長老の側近の教え子たちのことで、修道司祭アマヴローシイ (グレンコフ)、修練士レフ・カヴェーリン、イオアン・ポロフツェフなどの共同翻訳者である。彼らはスラヴ語のテキストをギリシャ語の原文と比較し、それをもとにロシア語訳を作成したのである。イワン・キレエフスキーは彼ら全員を聖師父文献の権威ある翻訳者として認めて、長老にこう答えている。

もしアマヴローシイ神父、アヴァ・イオアン [イオアン・ポロフツェフ]、レフ・アレクサンドロヴィチ [カヴェーリン] がこうした意見をお持ちであるならば、もちろん何らかの根拠があつてのことでしょう。とはいえ、長老さまを訪問したステパン・シェヴィリョーフなら、おそらく教授の権威をもって、あなたの疑問を解決してくれたことでしょう。¹⁴³

翻訳と校正の過程にはこうした言い回しや表現をめぐる見解の相違も起こっていたことがわかるが、あくまで同じ救いの目的のもとに生きる修道士の間の信頼関係の上に成り立つ議論であり、その解決のためには、時としてイワン・キレエフスキーや、モスクワ大学の教授シェヴィリョーフが仲裁者として介入してくることもあった。しかし、こうした書物が資するのが俗人ではなく、もっぱら修道生活に関心を持つ者であったことは、修道士たちが完成した訳語を読み合わせていたことによつてうかがい知ることができる。レオニード・カヴェーリンは 1853 年 1 月 21 日付でスキトの年代記に、「この日から (マカーリイ) 神父とともに翻訳を終えた聖バルサヌフィオスの本の読み直しを始めた」¹⁴⁴ と報告し、一月後の 2 月 24 日には、「夕刻に神父と聖バルサヌフィオスのロシア語訳を読み終えた。それは主よ、我が手の^{わご}工作を助け給へという然

¹⁴² Переписка И.В. Киреевского и преподобного Макария (Иванова), старца Оптинской пустыни. 1846-1856 годы. 23-е письмо Старца Макария. В кн.: Разум на пути к истине. С. 318. ここでいうドーロテオス (Авва Дрофей) とは、『靈に益ある教理と親書 (Душеполезные поучения и послания)』の著者として知られる 7 世紀の修徳的修行者である。この大バルサヌフィオスの問答においても、彼の質問が第 249 問以降に含まれている。

¹⁴³ Переписка И.В. Киреевского и преподобного Макария (Иванова), старца Оптинской пустыни. 1846-1856 годы. 24-е письмо И.Киреевского. В кн.: Разум на пути к истине. С. 320.

¹⁴⁴ Летопись скита во имя святого Иоанна Предтечи и крестителя Господня, находящегося при Козельской Введенской Оптиной пустыни. Т. 1. М., 2008, С. 256.

るべき祈りと、人間の弱さによって、翻訳に際して相互に犯した過ちを赦しあうよう求め合うことで終了した」¹⁴⁵ と書きつけている。その後、3月21日、訳稿は修道院で補足された聖伝や索引とともに、府主教フィラレート座下のお目通しを願うために、モスクワのキレエフスカヤのもとへ発送された。¹⁴⁶ こうして1853年の末に、ロシア語訳はゴルビンスキーによる検閲を受け、印刷するための承認を得たため、残すは印刷のために府主教から許可を得るだけとなった。因みに、ゴルビンスキーは、この翻訳本について「最も難解な箇所さえ、重要な意味は完全に保たれている」¹⁴⁷ と高い評価を与えている。

1855年2月7日にバルサヌフィオスのロシア語訳の写本はその一部がモスクワ神学大学の学監掌院セルギイ（リャピデツキイ）によって、印刷業務に携わるナターリア・ペトローヴナに渡された。掌院セルギイは、残りの写本を斎の第一週に手渡すことを約束した。¹⁴⁸ こうして三年近くかけて周到に準備されたロシア語版『指南書』が出版されたのである。¹⁴⁹

オプチナ出版によるこのロシア語訳のバルサヌフィオスは、1883年（第二版）、1892年（第三版）、1905年（第四版）と版を重ねた。ただ第二版以降は初版に付けられていた、パイーシイ長老の翻訳活動について物語る序文は外された。だが、この書物がロシア語に翻訳されたことの意義は、それが一般の庶民を対象とした所謂啓蒙書ではなく、むしろ、それがオプチナで実際に修行に従事する修道士たちによって深く誦読され、祈りの手段として用いられた後に熟慮され、時間をかけて作られた翻訳であったことにあった。その革新的役割を他ならぬオプチナ修道院が果たしたことをイグナーチイ・ブリャンチャニノフ神父は以下のように讃えているのである。

ロシアの修道制のすべては、父祖の思想をこれほどまで正確に翻訳したパイーシイ長老による膨大な聖師父文献の翻訳を出版したオプチナ修道院に特別の恩恵を受けている。修道制や父祖に関する著作のロシア語訳にしても、あなた方修道士たちの方が、修道生活についての知識があ

¹⁴⁵ Там же. С. 259.

¹⁴⁶ Там же. С. 268.

¹⁴⁷ Там же. С. 312.

¹⁴⁸ Там же. С. 343.

¹⁴⁹ Преподобных отцев Варсануфия Великого и Иоанна руководство к духовной жизни в ответах на вопрошения учеников: Перевод с греч. [Перевод со слав. на рус., сравнение с греч. текстом иером. Амвросия (Гренкова), Л. Кавелина, о. Ювеналия (Половцева)]. М., [Изд. Оптиной Пустыни]. 1855 (Унив. тип.). [2], XXX, 656, 102, 2 с. 1200 экз. С. 1-102 [Втор. пагинация] Алфавитный указатель наставлений, истолкований Св. Писаний и сказаний, содержащихся в книге ответов преподобных Отцев наших Варсануфия и Иоанна.

ることで、それとは無縁の暮らしをしている人々よりも、遥かに首尾よくなされています。掌院モイセイ神父は隣人の弱さをその繊細かつ忍耐強い配慮で肩代わりする能力を発揮したことで、ロシアのどこにも見られない選ばれた修道者たちの集まりを修道院の核心へと導き入れることができたのです。¹⁵⁰

7) 『聖ママント修道院の典院、克肖なる我らが神父、新神学者シュメオーンの12の講話』(1852)¹⁵¹ 『聖ママント修道院の典院にして司祭、新神学者シュメオーンの3つの講話』(1852)¹⁵²

これらの本はいずれも、マカーリイ長老がプロシヤンスク修道院に滞在していた頃、パイーシイ長老の翻訳手稿から手ずから書き取った写本に基づいて出版されたものである。写本の存在は複数確認されており、当時のオプチナ修道院のスキトの蔵書中にはアトスから持ち込まれた版や典院モイセイが筆写した版なども存在していた。ギリシャ語の原文には35話含まれているが、パイーシイが編集翻訳した版では12話であった。¹⁵³ つまり、オプチナで出版されたのは、所謂完全版(12講話)と簡略版(3講話)である。

事の発端は、パイーシイ長老が克肖者新神学者シュメオーンの『12話』を改訳したことに始まる。これが1869年にアナトーリイ(ゼルツァーロフ)神父とクリメント(ゼデルゴリム)神父によって始められるロシア語訳の土台となった。¹⁵⁴ 各頁に付けられた版に関する脚注にはギリシャ語やラテン語の本文とともに、数多くのヴァリエーションが対照されている。幸い、これらの翻訳の草稿を始め、新神学者シュメオーンの著作から転写された写本は多数残されていた。¹⁵⁵

新神学者シュメオーンの使用は、パイーシイが翻訳した『フィロカリア』に

¹⁵⁰ Письмо о. Игнатия (Брянчанинова) о. Макарию от 20 июля 1855 г. В кн.: Свят. Игнатий (Брянчанинов). Странствие ко врагам вечности: переписка с оптинскими старцами и П.П. Яковлевым, делопроизводителем свт. Игнатия. М., 2001. С. 81-82.

¹⁵¹ Преподобного отца нашего Симеона Новаго Богослова, игумена обители св. Маманта, двенадцать слов.: В рус. пер. с еллино-греческого. [Пер. иеромонаха Анатолия (Зерцалова), монаха Климента (Зедергольма).] М.: Изд. Козельской Введенской Оптиной Пустыни, 1869 (Тип. В. Готье). II, IV, 188 с. 1200 экз. 50 коп.; 2-е изд.: Троице-Сергиева Лавра, 1912.

¹⁵² Три слова преподобного отца нашего Симеона Новаго Богослова, игумена и пресвитера, бывшего от ограды св. Маманта: [Пер. о. Паисия (Величковского)]. М.: [Изд. Оптиной Пустыни], 1852. 1200 экз. 15 коп.

¹⁵³ А.В. Гвоздев. Мистико-аскетическая традиция в историософской концепции И.В. Киреевского. В кн.: Иван Киреевский. Духовный путь... С.398.

¹⁵⁴ 注149を参照。

¹⁵⁵ Творения Симеона Новаго Богослова. Черновик перевода 12 слов на русский язык с примечаниями. Рук. 1862 г. 190 л. НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-505.

作品が152章にわたって収められたため、ロシアの修道士の間ではよく知られていたが、スラヴ語で出版されたそれ以外の著作は少なく、痛悔規程の第七祈祷を除けば、パイーシイ長老の翻訳で出版されたスラヴ語版『12講話』（1852）くらいである。では、ギリシャ語の原文では35話でありながら、何故に12話になったのであろうか。長老自身の証言は存在しないものの、ギリシャ語の写本（現在では、モスクワの宗務院図書館に保管されている）と綿密に照合した結果、ロシアの修道士たちに最も需要の高い12講話に厳選し、それを要約して出版する決断を下したものであると思われる。この版では、各々の概念に注釈をつけた上に、若干の補足を加えていることから、そこにパイーシイの出版意図が隠されていたとも考えられる。

シュメオーンの著作の特徴は、神学的見識と認識の高さを背景に、知恵のいとなみの奥義を理論的に極めた点にある。正教会が彼を評して「新神学者」と名付けているのも、神学者イオアンネス（新約の福音作者）やニュッサの神学者グレゴリオスにも匹敵するその功績の現代的意義を認めているからに他ならない。例えば、1850年代のキレエフスキーは人間と神の交流を人間や事物の存在間の関係とは別次元と考えるようになるが、それは洗礼機密によって人間と神との自覚的關係性が構築されれば、もはやそれを人間の体験的意識によって分断することはできないと考えたからである。この創られし者（人間）と創られざりし者（神）の關係に対する自覚の要求は、とりわけ新神学者シュメオーンを初めとする多くの聖師父が信仰者たるべき人間に要求したことであった。¹⁵⁶

本書の際だった特徴としては、書物の内容が、概して罪人、分けても修道士の救いの手段としての悔改に関する正教的教理の記述となっていることである。加えて、各講話にはそこで語られることになる主な事項の記述を含む詳細なタイトルが付けられていることが挙げられる。それに従って、「シュメオーンは悔改の不可欠性をとりわけ詳細かつ教訓的に解明し、真の悔改の意味について、悔改と信仰、信仰と善行との不可分性について、さらには、精神的に善良な気分に含まれた時の善行の価値についての的確な指示を与える」¹⁵⁷ことが可能となった。教訓的な目的を持って書かれた本書がとりわけ修道士にとって有益であることはいうまでもない。本書を出版しようというオプチナの長老たちの決断が善良なものであるならば、若き修練士たちにとっては、それが実践的

¹⁵⁶ См.: К.М. Антонов. Философия И.В. Киреевского. Антропологический аспект. М., 2006. С. 197.

¹⁵⁷ Никодим (Кононов), архим. Старцы: отец Паисий Величковский и отец Макарий Оптинский и их литературно-аскетическая деятельность. В кн.: Отчественные подвижники благочестия XVIII- XIX вв. Изд. Введенской Оптиной Пустыни, 1996. Сентябрь. С. 510.

かつ教訓的なお手本となることは疑いの余地がないからである。ロシアの修道士たちには、ビザンツの修道的伝統を受け継ぐために、正しい方法による主体的修行が求められていたのである。

例えば、第一講話には早朝から夜遅くまでの、一日の修道生活の規範について細部に至るまで叙述されている。つまりそうすることで、これらすべての細部や細かい部分に光が当てられ、修行に関わる主要な美德と緊密に関係づけられる。つまりそこには、修道生活の規律の必要性和価値が指摘され、これら細かい日常の修道規則を実行に移すための最良の方法が示されるのである。また第六講話では、靈的な修行を始めたばかりの修練士にしばしば起こるような違反、誤謬、墮罪といった悪の概念が具体的に示されている。しかも、本人は良かれと思って行動し、自分は完全であるとしばしば誤解している場合があることも指摘されている。そのような場合、やはり修道士にとっての学校としての役割を担っているのが長老制である。これについては靈の子（第七講話）、修道院管長（第八講話）、長老（第九講話）らが取べき態度や理想の性格に至るまで詳しく述べられているのも特徴的である。

オブチナの修道院長のモイセイの実兄であるイサイヤ神父が同書について、「聖シュメオンの著作を読み給へ。そこには救いへ至る直接的かつ迷いのない道が示されている。正直に言うが、すべての記述（聖師父の著作）が我が靈にとってには甘美なのだ。本書は何よりも有益で、心地よいものと感じられる」¹⁵⁸ といった感慨を漏らしているのも故なきことではない。

8) 『ストゥディオス僧院の典院にして我等の克肖捧神なる神父・証聖者テオドーロスの啓蒙教理書』（1853）¹⁵⁹

同書を出版する機運が高まったのは、スキトのマカーリイ長老の庵室の蔵書中にパイーシイ・ヴェリチコフスキーによる翻訳の手稿が入っていたことによる。また、修道院の手稿輯にもストゥディオスの聖テオドーロスの教理を筆写した古い写本が何点か含まれていた。なかでも、1697年の記録のあるものは、同修道院に所蔵された最古の写本のひとつとして注目されている。¹⁶⁰ パイーシイ版の手稿はクリメント（ゼーデルゴリム）神父によって、複数存在するスラヴ語訳や、時にはラテン語訳とも照合された。出版のための準備作業にはア

¹⁵⁸ НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-361. Л.91. Цит. по кн.: В.В. Каширина. Указ. соч. С. 113.

¹⁵⁹ Огласительные поучения преподобного и богоносного отца нашего Феодора Исповедника, игумена обители Студийския, переведенные с греческого старцем Паисием Величковским: [на слав. наречии]. М.: Изд. Козельской Введенской Оптиной Пустыни. 1853. [2], 286, VI, [2] с. 600 экз.

¹⁶⁰ Творения Феодора Студита и его житие. Рук. 1697 г., скоропись на 376 л. НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-480.

ナトーリイ（ゼルツァーロフ）神父やユヴェナリイ（ポロフツェフ）も参加した。

当時のオプチナの古文書館には、19世紀中葉に多くの修正が施されたと推測されるストゥディオスの聖テオドロスの著作のロシア語による写本が保管されていた（Ф. 214. Опт-484）。とりわけ『ストゥディオスの聖テオドロスの啓蒙教理書』と題されたロシア語訳の234枚目の裏には、鉛筆による修正がびっしりとなされているが、それによると、内容は4部に分類される。1）1860年の掌院ゲンナージイ神父宛ての書簡の写し（主題は死者の霊は地上の住居や聖堂を訪れることができるのかなど）。2）テオドロスの簡潔な聖伝、著作一覧、翻訳に際して使用された文献の注釈を含む序文、3）95編の説教（翻訳に際し、現代ギリシャ語訳が参照された）、4編の説教（古代ギリシャ語の原典から翻訳）など。4）ストゥディオスの聖テオドロスの遺訓（古代ギリシャ語からの翻訳）である。¹⁶¹

同書はタイトルに『啓蒙教理書』と謳っているように、修道生活の規則とその解説に重点が置かれている。章の構成は95の啓蒙講話とギリシャのストゥディオス修道院の規則の解説がその内容を構成している。これを見ても、上の写本がほぼすべて最終稿として生かされていることがうかがえる。同書がイワン・キレエフスキーの歴史哲学の認識にとって重要な位置を占めていたのは、ロシアの修道院の大部分は12-14世紀のこの修道規則にしたがってその「知恵の祈り」のいとなみを行っていたからである。周知の通り、14世紀になると、ストゥディオス修道院の規則はエレサレムの規則に取って代えられるようになる。このことは、規則の重点が祈り中心の修道生活の内的ないとなみから、礼拝中心の外的な規則へと移り変わったことを意味していた。それにも拘らず、オプチナ修道院が19世紀を通じて「知恵のいとなみ」を放棄しなかったことは、ストゥディオスの厳格な修德的祈りの血脈を受け継いでいたからではなかろうか。

パイーシイのスラヴ語訳に基づくスラヴ語版は1853年の初頭に出版された。しかし、この出版事業にイワン・キレエフスキーは直接参加していない。というのは、この年、彼は論文『ヨーロッパの啓蒙の生活とそのロシアの啓蒙への関係について』（1853）の執筆に専念していたからである。しかし、彼がこの論文で、ロシア的啓蒙の根本的役割を神秘的な祈りの実践者、その伝統の継承者たちに託していたことを考慮するならば、その意味において、彼はオプチナ

¹⁶¹ Поучения (Оглашения) Феодора Студита. Перевод на рус. яз. Рук. 1860-1872 гг, скоропись, на 234 л. НИОР РГБ. Ф. 214. Опт-484. Цит. по кн.: В.В. Каширина. Указ. соч. С.119.

の修道士たちと全く同じ立場を共有していたとすることができるだろう。新しいロシア語訳が1872年にモスクワで出版されると、1896年にはオプチナ修道院から近いカルーガ市でもその重版が出版された。¹⁶²

(以下次号に続く)

Keywords: オプチナ修道院 聖師父文献 マカーリイ (イワノフ) 長老 パイシー・ヴェリチコフスキー イワン・キレエフスキー

¹⁶² Преподобного и Богоносного отца нашего Феодора игумена Студийской обители и исповедника Огласительные поучения и завещание; В рус. пер. с греч. [Пер. с греч. иеросхим. Анатолия (Зерцалова), монаха Климента (Зедергольма)]. М.: Изд. Козельской Введенской Оптиной Пустыни, 1872 (Тип. В. Готье). X, 11-342, [2], VI с., 1 л. Порт. 1200 экз.; 2-е изд.: Калуга: [Изд.] Козельской Введенской Оптиной Пустыни, 1896 (Тип. А.М. Михайлова). X, 11-342, VI с. 1 л. Литогр. 2500 экз. 1 руб.